

# 旭市（旧干潟町）道木内遺跡出土ウマの再検討

小川 慶一郎

## はじめに

道木内遺跡は旧干潟町（現旭市）清和甲字道木内地区に所在する（第1図）。1990年に主要地方道多古笹本線県単道路改良事業に伴い発掘調査が実施された。旧干潟町は旧椿海を干拓して形成された広大な水田地帯、利根川水系の黒部川が複雑に開折した下総台地から成る。道木内遺跡は標高50mほどの台地上に位置し、遺跡が位置する台地は椿海につながる支谷と黒部川によって開析され、やせ尾根状を呈する。

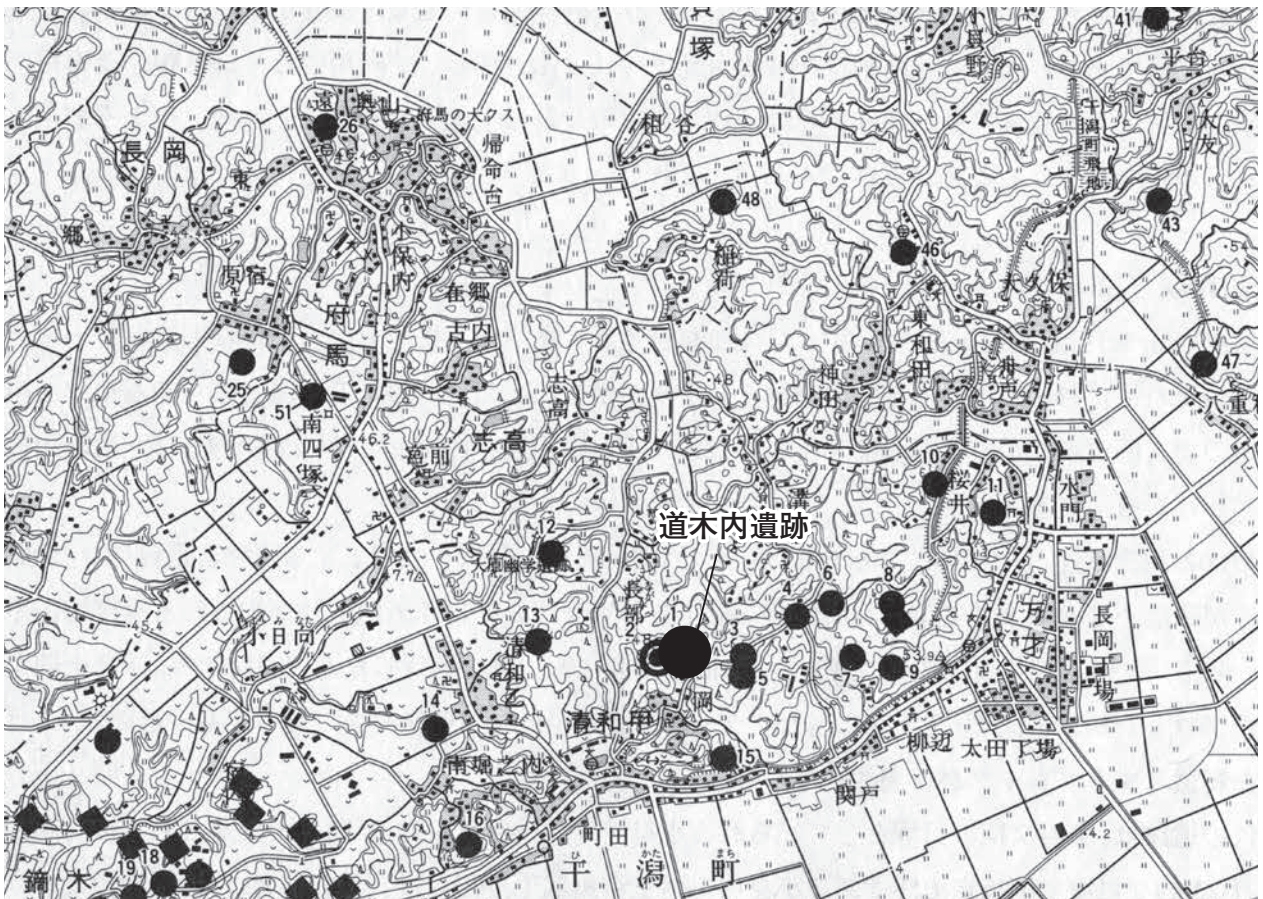
発掘調査の主な成果として、奈良・平安時代の集落と中世（14世紀代主体）の台地整形区画と台地整形に伴う遺構群が確認された。特に中世の遺構群について、発掘調査報告書刊行時点では東総地域で希少な事例として取り上げられている。中世遺構群の中でも台地整形区画の南西端に位置する001-082土坑から、ウマ

の埋葬個体が確認されている（第2図、第3図）。今回はこの001-082土坑出土ウマの同定・計測結果から、道木内遺跡におけるウマの利用について検討を行う。

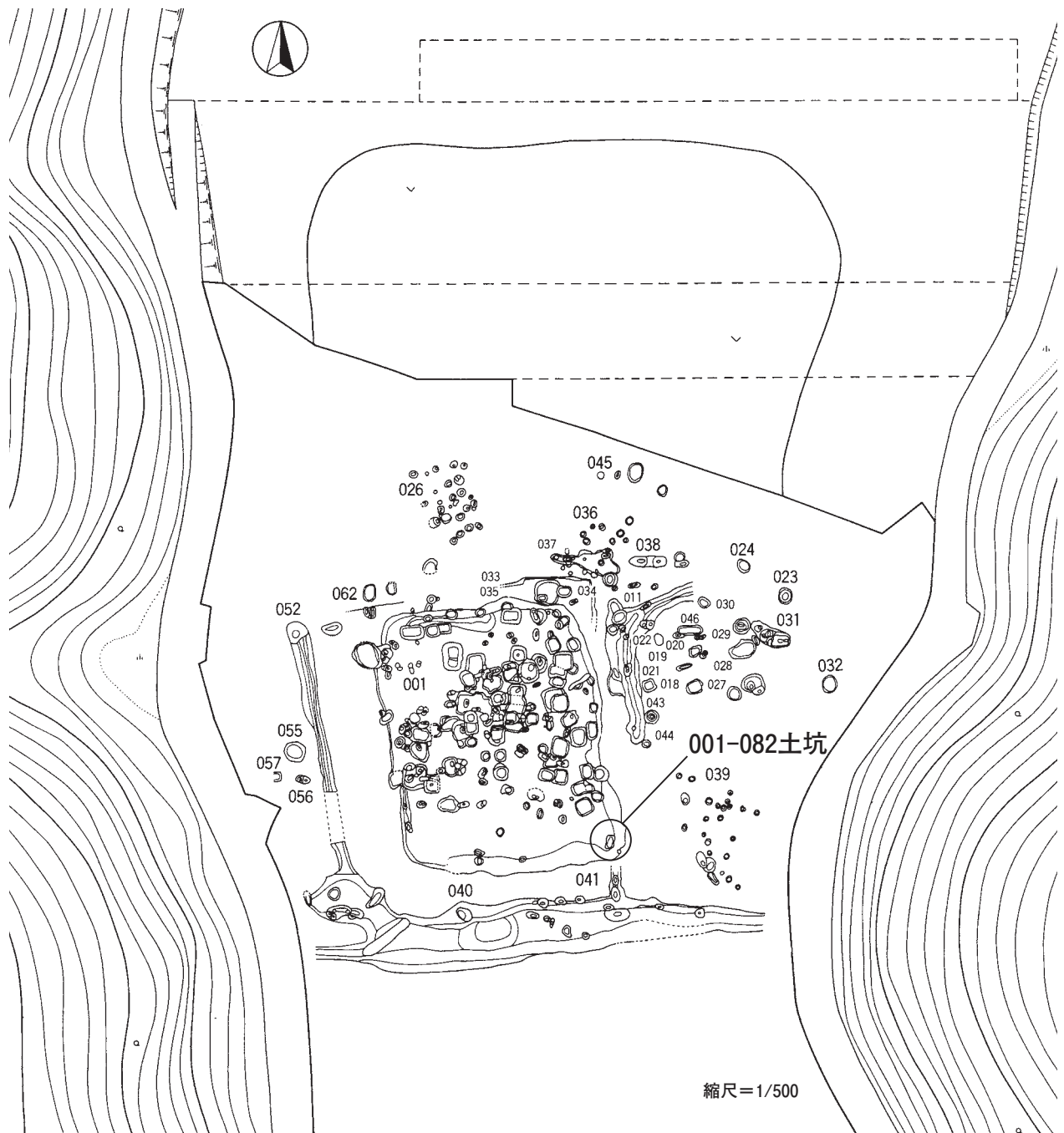
## 1 資料と方法

### (1) 資料

資料は土ごと取り上げられた後、未水洗の状態であり、全般に風化が進み遺存状態が不良であったことから、クリーニング作業と並行し、ナチュラルコート（遺物表面コート剤）を塗布し資料の強化処理を行った。いずれも調査時に目視による確認で採集された現地採集資料である。なお、報告書中では「出土した馬骨は顎と上肢骨の一部とみられ、折り重なったような状況で出土した」と記載されていたが（千葉県文化財センター 1997）、今回実見した資料は上顎骨、下顎骨、遊離歯しか確認できなかった。



第1図 道木内遺跡位置（千葉県文化財センター 1997を一部改変）



第2図 中世遺構配置 (千葉県文化財センター 1997を一部改変)

## (2) 分析方法

**同定** 同定は現生標本との比較によって行った。比較に用いた現生標本は奈良文化財研究所環境考古学研究室所蔵の標本である。その他松井章氏の骨格図を参考に同定を行った (松井 2008)。同定可能なすべての部位を対象とした。第1表に同定結果の一覧を記載した。

**計測** 臼歯列長の計測位置はDriesch 1976、松井 2008に従った。臼歯の計測位置は植月2011 a、西中川ほか2015に従った。

**体高・年齢推定** 西中川駿氏らの推定法 (西中川ほか2015) を使用し、臼歯中心高 (HC) から年齢推定を、

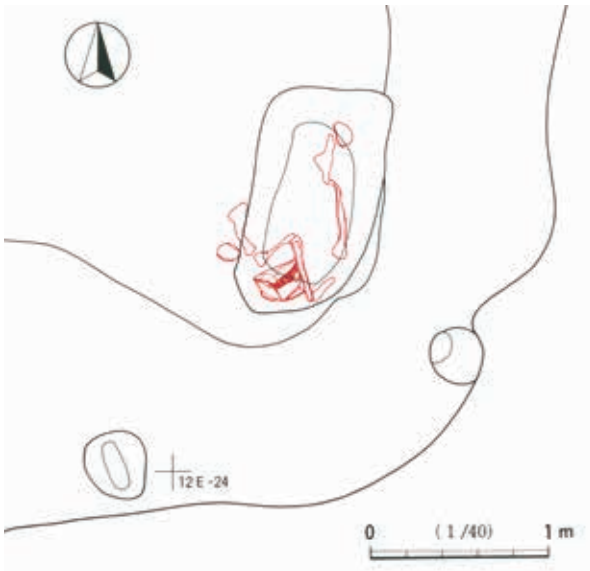
臼歯列長から体高推定を行った。計測結果は計測可能なものをすべて記載したが、年齢・体高推定は推定式の相関が高いもののみを用いて計算した (第2表)。

**その他観察項目** 解体痕、加工痕、銜痕、食肉目によると推測される咬痕などの痕跡は確認できなかった。

## 2 結果

### (1) 同定結果 (第1表)

ウマの上顎骨、下顎骨、上顎歯、下顎歯が確認された。四肢骨など頭部以外の部位骨は確認できなかった。なお上顎・下顎ともに切歯が確認されていること、接合、同定が不可能な細片が存在することから、本来は



第3図 001-0082土坑馬骨出土状況  
(千葉県文化財センター 1997を一部改変)

第1表 固定結果

資料番号	部位	左右	数	残存位置	備考
1	上顎骨	L	1	[P2 P3 P4 M1 M2 M3x]	
2	上顎骨	R	1	[P2 P3 P4 M1 M2 M3x]	
3	下顎骨	L	1	[P2 P3 P4 M1 M2 M3]	P2は第2咬頭のみ遺存
4	下顎骨	R	1	[P2 P3 P4 M1 M2 M3]	P2は第2咬頭のみ遺存
5	上顎歯	L	1	I1	
6	上顎歯	L	1	I2	
7	上顎歯	R	1	I1	
8	上顎歯	R	1	I2	
9	下顎歯	L	1	I1	
10	下顎歯	L	1	I2	
11	下顎歯	R	1	I1	
12	下顎歯	R	1	I2	

第2表 測定結果 (臼歯列長)

※各推定式は西中川ほか 2015の2次回帰式を使用した  
 ※全は全臼歯列長、前は前臼歯列長、後は後臼歯列長 (松井 2008)  
 ※-は破損等で計測不可のもの

掲載番号	部位	左右	計測結果(mm)			頭蓋最大長および下顎全長の推定結果(mm)	推定体高(cm)
			全	前	後		
1	上顎骨	L		69.80			
2	上顎骨	R		69.11			
3	下顎骨	L			77.60		
4	下顎骨	R	158.02	82.02	77.19	40.30	128.45

第3表 計測結果 (臼歯歯冠長・歯冠高)

※各推定式は西中川ほか 2015の2次回帰式を使用した  
 ※HBはエナメル質側面の高さ、HCは歯根中心部での高さ (植月 2011)  
 ※-は破損等で計測不可のもの

掲載番号	部位	左右	残存位置	計測結果 (mm)			推定年齢	臼歯列長推定結果 (mm)	頭蓋最大長および下顎全長の推定結果 (mm)	推定体高 (cm)
				HB	HC	L				
1	上顎歯	L	M2	16.76	14.48	25.49	19.19	171.44	51.71	137.65
1	上顎歯	R	P2	24.07	16.95	29.06	15.88	143.50	48.07	123.18
1	上顎歯	R	M2	17.20	14.07	25.63	19.36	172.31	52.16	139.04
全体				-	-	-	18.14 ± 1.22	-	-	133.29 ± 5.75

歯列が完存していたものと想定される。切歯・臼歯のいずれも摩耗が著しい。

(2) 計測結果 (第2表、第3表)

推定年齢は $18.14 \pm 1.22$ 歳、推定体高は128.45cmという結果が得られた。

### 3 考察

(1) 出土遺構と埋葬状況

001-082土坑とウマ出土状況について改めて振り返り、ウマ埋葬状況の復元を行いたい。001-082土坑は台地整形区画南東端に位置する (第2図、第3図)。周囲の遺構密度は希薄で重複する遺構はない。やや崩れた方形を呈し、長軸1.2m、短軸0.7m、確認面から床面までの深さは13cmである。覆土はロームブロックを主体としたしまりのない土層である。ウマは頭部と前肢が出土しており、出土状況図からは頭部に前脚が重なる様子が分かる。

埋葬土坑としての規模を他地域の集成結果 (植月 2013) と比較すると、比較的小型の土坑であることがうかがえる。ただし中世段階によくみられる地下式坑などの土坑の二次利用というよりは、ウマの埋葬姿勢に合わせた方形の平面形状から、元々埋葬土坑として掘削を行ったものと考えられる。また覆土の観察結果から、自然堆積層ではなく埋め土層である可能性が高い。なおウマの頭部は南東壁に接する形で出土しており、前肢の出土状況からも比較的解剖学的位置を保っていることが分かるため、特定部位の埋納や廃棄といった状況ではなく埋葬個体であると判断できる。ウマの死後に埋葬用の土坑を掘削し、遺体を安置した後に土を埋戻し埋葬を行ったものと思われる。

(2) 年齢・体高復元

遺跡出土ウマの年齢について、中世東国では10歳前後にピークがみられる傾向が指摘されている。近世段階では14歳以上の高齢個体に偏る (植月 2018)。本報告の資料に関しては、 $18.14 \pm 1.22$ 歳という結果が得られたが、中近世の東国においてかなりの高齢個体といえよう。また推定体高については、臼歯列長の計測結果から128.45cmという結果が得られた。しかし頭部に関しては、個体ごとの変異が大きいため、四肢骨と比較して推定体高を算出するための資料としては不向きであることが指摘されている (植月 2011 a など)。ただし、計測可能な部位が臼歯に限られたため、本報告においては、あくまで暫定的な数値として扱うことをご容赦願いたい。推定体高から日本在来馬の範疇におさまる個体であることが分かる (西中川ほか 2015)。

中世段階の道木内遺跡は、遺構や遺物の性格から下位の土豪層または上層農民層の屋敷地に類するものと考えられている（千葉県文化財センター 1997）。このような中世の屋敷地や館跡では、6～14歳の壮齢個体が多い。なお近世段階では15歳以上の老齢個体が中心を占める。古代の牧において、軍馬の基準に満たない個体を間引いて死馬の加工処理を行っていたため、4歳前後の若齢個体が主体であることと比較すると、中近世では軍用や農耕用に使役し、明確な処分のシステムを持たないことが示唆されている（植月 2013）。

以上の事柄をふまえると、道木内遺跡出土ウマは、老齢で亡くなるまで飼育され、死後は手厚く葬られたことがうかがえる。生前の利用状況については、プロポーシオンや銜痕が不明であるため確定的なことは言えないが、遺跡の性格や死亡年齢を踏まえると、軍用というよりは主に農耕馬として利用していた可能性が高い。

## 謝辞

同定に際し、奈良文化財研究所環境考古学研究室の山崎健氏、松崎哲也氏、坂本匠氏にご教示いただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- Angela Von Den Driesch 1976 A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Peabody Museum Bulletins 1, Peabody Museum Press, Cambridge
- 植月 学 2011 a 「出土馬骨計測値の比較のための基礎的研究」『動物考古学』28号 動物考古学研究会
- 植月 学 2011 b 「甲斐における平安・鎌倉時代の馬産－ウマ遺体の分析による検討－」『山梨県考古学協会誌』第20号 山梨県考古学協会
- 植月 学 2013 「甲斐周辺における馬埋葬と頭骨埋納－甲府市朝気遺跡出土のウマ遺体－」『山梨県考古学協会誌』第22号 山梨県考古学協会
- 植月 学 2018 「東国における牛馬の利用」『季刊考古学』第144号
- 小川慶一郎 2021 「第4節 動物遺体」『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書37－多古町千田の台遺跡（1）－』
- 覚張隆史・植月学2016 「同位体化学分析に基づく山梨県域遺跡出土馬の給餌形態の復元」『山梨県考古学協会誌』第24号 山梨県考古学協会
- 千葉県文化財センター1997 『主要地方道多古笹本線埋蔵文化財調査報告書3千湯町道木内遺跡・椎木遺跡』
- 松井 章 2008 『動物考古学』京都大学学術出版会
- 道上 文 1999 『馬と船橋』船橋市郷土資料館
- 西中川駿・幸村真由美ほか2015 「ウマの臼歯の計測値から体高および年齢の推定法」『動物考古学』32号 日本動物考古学会